



～鳥取県産業技術センターで働く魅力をお伝えします～

Innovation Together



企業の皆さまの
研究室です。

私たちは、産業技術の試験研究や
その成果の普及とともに、
ものづくり分野における技術支援・人材育成に
取り組んでいます。

地域企業とともに挑戦し、
県内産業の活力を高め、
経済の発展と暮らしの向上を目指しています。

我々と一緒に、
あなたの研究、技術、アイデアを、
地域の未来に活かしてみませんか。

- 01 鳥取県産業技術センターの組織と歴史
- 02 私たちセンターの仕事
- 03 私たちセンターの役割・ビジョン
- 04 働く人 インタビュー
- 05 働く環境、待遇など

鳥取県産業技術センターの

組織と歴史

Innovation Together



境港：食品開発研究所

鳥取県境港市中西町2032-3

農畜水産物の加工や機能性食品、発酵食品などの技術支援や研究開発を行っています。

● 食品加工グループ

食品加工全般、農商工連携推進に関連する技術に関する研究開発・技術支援を行っています。

● 発酵・機能性食品グループ

フードテック、バイオ技術を活用した酒類等の発酵食品、境港市機能性食品等に関する研究開発・技術支援を行っています。

● 食品安全・品質技術グループ

食品の衛生管理、製造工程管理、HACCP等の認証取得に関する相談対応や各種講習会を行っています。



米子：機械素材研究所

鳥取県米子市日下1247

機械・金属分野での素材から加工までの「ものづくり技術」に係る技術支援や研究開発を行っています。

● システム制御グループ

製造工程の自動化・省力化、ロボット技術などの高度化に関する研究開発・技術支援を行っています。

● 機械・無機材料グループ

金属・セラミック材料等の機械加工及び各種無機材料に関する研究開発・技術支援を行っています。



鳥取：本部／電子・有機素材研究所

鳥取県鳥取市若葉台南七丁目1-1

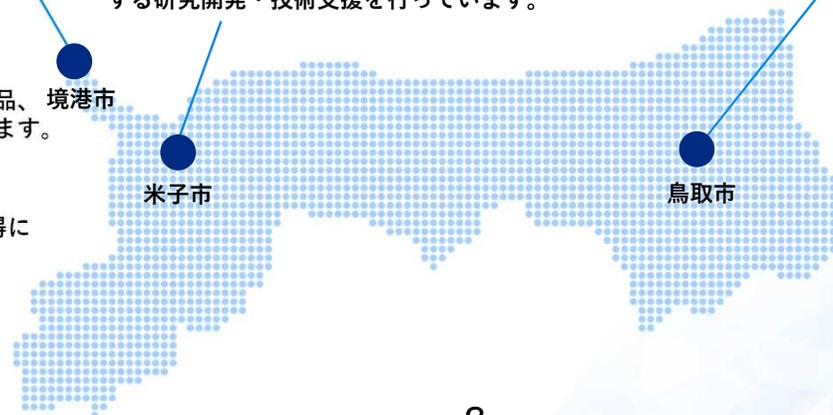
電気電子、有機材料に関する「ものづくり技術」に係る技術支援や研究開発を行っています。

● 電子システムグループ

電気・電子関連製品などの制御技術、信頼性評価技術、AI、IoT（計測技術、ソフトウェア）に関する研究開発・技術支援を行っています。

● 有機材料グループ

各種有機材料の機能化技術、加工技術、評価技術に関する研究開発・技術支援を行っています。



積み重ねた100年の支援の歴史。時代に合わせ、県内企業の成長を支援し続けます。

1923 - 1965

設立から大戦・戦後復興へ、地場産業とともに

- 1923年、農商務大臣から設立認可を受け、醸造部門、製紙部門からなる試験研究及び技術指導機関として工業試験場が設立されました。翌年、鳥取市西町に本庁舎完成。
- その後、窯業部、染織部、木工部が相次いで新設されるも、太平洋戦争で規模縮小を余儀なくされました。
- 終戦後には地方産業の振興のため業務を順次再開し、1949年には工芸図案部を新設しました。一方で、戦後の食糧難を乗り切るため、1948年、米子市旗ヶ崎に鳥取県立農産加工所を設立。食糧増産や加工に関する研究が盛んに行われました。



1989 - 2007

平成不況、技術革新と産業技術センターへの統合整備

- バブル崩壊後の国内経済低迷の中、新素材や応用製品の開発の為、企業が最先端の装置を利用できるよう1991年、工業試験場米子分場に先端技術開放試験室を設置。また、翌年からは、県内企業の技術者・研究者の人材養成事業を開始しました。一方で、今後の産業界の技術革新や県内企業の技術ニーズの変化への対応を目指し、1998年に「鳥取県産業技術センター」に改称。
- 2000年、本庁舎を所在地の鳥取市若葉台へ新築移転。新たな機器・実験室の充実を図りました。
- 2003年には、応用技術部を機械素材研究所と食品開発研究所へ改組。翌年には、機械素材研究所を現在の米子市日下に移転し、産業創出拠点として活動を開始しました。
- 2007年には、食品開発研究所に高機能開発支援棟を新設し、新技術開発等の支援を拡充しました。



1966 - 1989

高度経済成長から安定成長へ、相次ぐ工場立地と支援拠点整備

- 1966年、境港市渡町に移転していた農産加工所が食品加工研究所に改称し、あわせて水産食品部門を新設し、水産加工品へも対応開始しました。
- 1970年に米子市が新産業都市に指定されたのを受け、機械・金属工業の育成発展を図るため、工業試験場に米子分場（機械金属科）を開設しました。
- 1972年、総合的食品研究所としての機能強化のため、食品加工研究所に畜産加工部門、翌年には菓子食品部門を新設しました。
- 1978年には、工業試験場本場、食品加工研究所が、それぞれ鳥取市秋里、境港市巾野町へ新築移転しました。
- 1987年には工業試験場本場に応用電子科を新設。県内の主要産業となった電気・電子業界への製品化支援・人材育成に務めました。

2007 - 現在

地方独立行政法人化、産業再生と成長、新たな時代へ

- 2007年、地方独立行政法人へと移行。県東部の技術開発部を電子・有機素材研究所に改組し、3研究所体制としました。
- 2015年、食品開発研究所に商品開発支援棟増設。地元産品を用いた特徴的な食品開発へとつながりました。
- 2019年には機械素材研究所に「とっとりロボットハブ」を整備。企業単独では困難な、スマート工場化の事前検証が可能となりました。
- 2023年には、設立100周年を迎えました。



私たちセンターの
仕事

Innovation Together

電子・有機素材研究所

- 電子システムグループ
- 有機材料グループ

主な取組

DX推進とSDGs・カーボンニュートラルに向けた取組を企業の皆様と共に進めます。AI・IoT技術を活用して県内製造業の省エネルギー化や生産性向上を図るとともに、有機素材の開発や応用によって低炭素社会の実現を目指します。

生産性向上のためのDX推進

AIやIoTを活用した自動化・最適化・予知保全などの解決策を提供し、生産性向上のためのDX推進に取り組めます。

環境に配慮した有機材料開発の推進

バイオマス等を活用したカーボンニュートラルに向けた環境配慮型有機材料の開発のため、企業の皆様との共同研究・開発を目指します。

機械素材研究所

- システム制御グループ
- 機械・無機材料グループ

主な取組

次世代輸送機器の軽量化、資源循環、省エネルギー、製造工程の省力化などへの対応を強化し、成長分野への参入を目指す県内企業の技術革新ニーズに応えるための研究開発や技術者育成に取り組めます。

シミュレーションによるものづくり技術の高度化

シミュレーションによる加工現象の可視化により、加工技術の高度化や工具・金型寿命の向上を実現し、脱炭素社会への対応を強化します。

ロボット技術による自動・省力化

専用治具、視覚・触覚センサなどの各種周辺機器を駆使したロボット技術を製造ラインへ実装し、生産工程の自動・省力化を推進します。

食品開発研究所

- 食品加工グループ
- 発酵・機能性食品グループ
- 食品安全・品質技術グループ

主な取組

食品産業の再生と持続的発展を実現するため、フードテック活用によるフードロス削減・アップサイクルの促進や食品の高付加価値化を目指した研究開発や技術者育成、アフターコロナを見据えた商品開発や衛生管理を支援します。

食品産業におけるSDGsの推進

企業現場のフードロス情報から、それらを素材化する研究開発を行い、付加価値の高いユニバーサルフードデザインの新製品開発を目指します。

食品の衛生管理の推進

事業者の食品の安全・安心の意識向上を図るための窓口を設置し、相談対応や専門機関へのナビゲート、衛生管理手法の研修会を実施します。

研究員の仕事は大きく分けると「支援業務」「研究開発業務」の2つ。

自身の専門知見を活かし、県内企業の成長・発展に直接的に関わることができます。

支援業務



- 技術相談
製品開発や生産工程などの課題を伺い、専門家として課題改善・解決に向けて伴走します。
- 機器利用
試験機器を貸し出し、安全に試験・分析を行えるようサポート。得られたデータの解釈や活用法を助言することも。
- 依頼試験
企業が求める内容を踏まえ、評価や解析などを行います。
- 技術人材の育成
自社課題をテーマにした個別研修や技術の進化に応じた新たな知識や分析手法、機器操作、品質管理などを学ぶセミナー・研修会などを企画・開催します。

研究開発業務

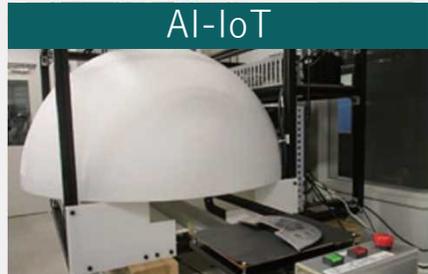


新たな技術や製品開発など、県内企業のニーズに基づいてテーマを設定し、研究開発を行います。

個社ごとに研究開発を行うこともあれば、複数企業や大学等と連携したチームで研究開発に取り組むことも。

- 企業の課題解決や新たな技術実装のために、企業や大学等とのチームで共同研究を行います。
- 科研費等の競争的外部資金を獲得し、県内企業や大学等と研究開発に取り組むこともあります。

AI-IoT



外観検査用撮影装置

生産管理システムを構築したうえで、AI画像処理による自動外観検査システムの開発を支援しました。

IoT



工場の見える化システム DXPOT

工場の機械にセンサを取り付け、リモートで稼働状況等のデータが確認できるIoT共通プラットフォームを開発しました。

電子回路



すくみ足サポート

すくみ足患者の歩行を支援する装置の開発を支援しました。電子回路設計をはじめ機能開発や検証のための実験、試作等を支援し、製品化に貢献しました。

電子材料



高反射率を持つ無機塗料

UV(紫外線)照射による殺菌用途としてUV LEDが高い注目を集めています。紫外線で劣化せず高反射性を有するレジストインクおよびLED用基板を企業と共同開発しました。

プラスチック材料



リサイクルプラスチック ペレット

廃プラスチック製品から製造されるリサイクルプラスチックペレットの定期的な強度評価を行い、製品の品質管理に役立っています。

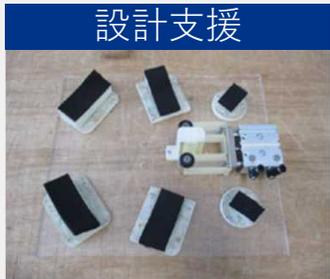
伝統産業



因州和紙藍染製品

和紙製品の独自藍染加工技法開発に企業とともに取り組みました。その結果、和紙の表情と藍のグラデーションを活かしたアクセサリ等が商品化されました。

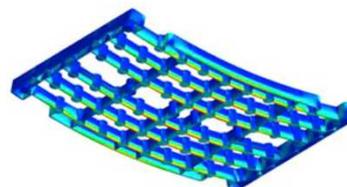
設計支援



ねじ締めロボット用治具

曲面上のねじ締めを行う自動機の製作において、ワークを垂直に設置するための治具や電動アクチュエータを用いた位置決め機構を考案し、製造ラインへの実装を支援しました。

トポロジー最適化



熱処理トレイの軽量化

シミュレーション技術をもとに熱処理トレイの軽量化設計を支援しました。トレイの剛性と強度を維持した上で軽量化を実現し、企業に技術移転しました。

曲げ加工



次世代自動車用配電部材 （バスバー）の量産技術開発

電気自動車等で大容量電流を分岐する際に必須な配電部材の量産に向けた加工方法について共同研究を行い、特許出願し技術移転しました。

生産技術



アルミ端面制御

薄さ1mmのアルミコイル製品の端面補正を自動で行うことが可能な安価な装置を開発し、企業に技術移転をしました。

熱処理



磁束密度制御治具

起伏が大きく薄い部品において熱処理が不十分な箇所が生じることを防止するため、磁束密度を制御する治具を開発し、複雑形状部品に選択的に高周波焼き入れ可能な方法を技術移転しました。

自動化制御



アンカーボルト製品 十字溝塗装の自動化

アンカーボルト製品の頭部の十字溝に赤色塗料を一定量滴下するピペットと協働ロボットを組み合わせ、塗装の自動化実験を行い、生産性の向上と作業環境の改善を実現しました。

味覚分析



焙煎よもぎ茶

春よもぎの風味にこだわった焙煎加工条件を確定するため、官能評価と機器分析を組合せた品質評価を行い、特長のあるよもぎ茶を開発しました。

粉末加工



黒にんにくパウダー

粉碎中に吸湿しやすい黒にんにくを、賦形剤を使わないで乾燥粉末化できる方法を検討し、スティック状に包装できるようになりました。

【国際味覚審査機構の「2022年度優秀味覚賞」の二つ星を受賞】

冷凍応用



柿ピューレ

冷凍を用いることで作業性を改善するとともに、渋戻りがなく、安定した品質の柿ピューレで製造できるようになり、多様な製品に使うことが可能になりました。

未利用水産物の活用



さわら蒸し煮干し

市場価値の低いサワラの幼魚であるサゴシの脂肪量が少ないという特徴を活かし、蒸し干しでつくることで非常に旨味の強い煮干しを開発しました。

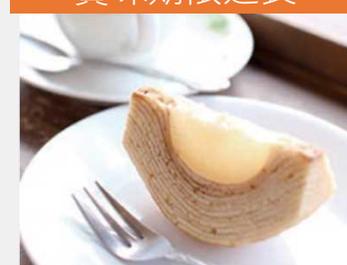
発酵食品開発



サワービール

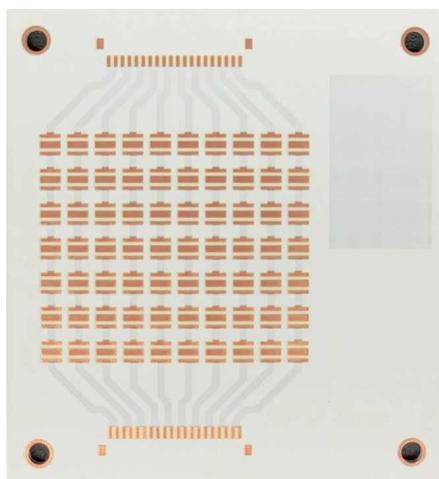
独自性、地域性をもった商品開発のため、オリジナルな乳酸菌を酒蔵から分離し、試験醸造を経て、酸味に特徴のあるビール「サワービール」の開発につながりました。

賞味期限延長

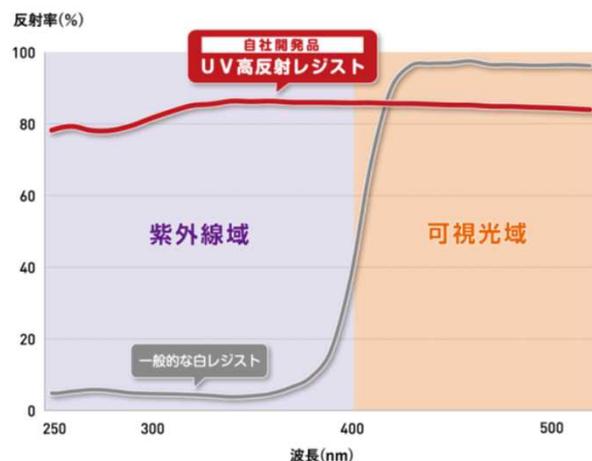


梨のバウムクーヘン

製品を解凍する時の、内部の温度や水分活性の変化を追跡することで、持ち帰り時間の延長、解凍後の賞味期限の延長が可能になり、販路を拡大できました。



基板白色部（無機系レジスト）



製品化・人材育成事例

県内企業と共同で製品化！ 紫外線をはね返し劣化しにくくする基板用レジスト塗料 耐UV高反射レジスト基板

■ アロー産業株式会社

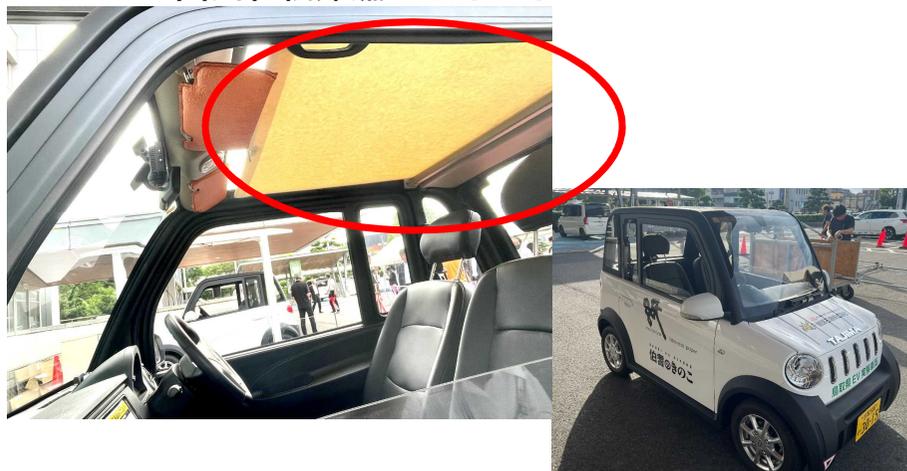
近年、耐紫外線（UV）特性への要求が高まっていることから、同社は、高UV反射を有する無機材料をベースとした基板用レジスト塗料を開発するため、当センター「ものづくり人材育成塾」を受講されました。センター研究員の伴走支援のもと、同社担当者はベースとなる樹脂の組成配合からUV反射率や塗膜性能評価までの技術を習得されました。

この人材育成事業受講を契機に、同社は当センターとの共同研究に取り組み、紫外域（250～400nm）での反射率が80～90%の基板用レジストの開発に成功しました。現在は、基板用レジスト塗料のUV反射率の一層の性能向上に向け、日々取り組んでいます。



不燃性評価の様子

因州和紙難燃ブラインド



難燃和紙を天井に装着したEV車

研究開発事例

伝統工芸品「因州和紙」によるEV車内装品の開発 車載向け難燃和紙の開発

■ 株式会社中原商店

従来の車載内装材には、**100%**石油由来の素材である難燃性ウレタンと塩化ビニル素材が使われており、カーボンゼロを目指すEV自動車にはマッチしません。

カーボンニュートラル時代の到来により因州和紙が車載向け内装材に使えるのではないかと、同社は自動車メーカーへの訪問調査を続けてきましたが、一番の問題は「燃えやすい和紙は自動車内装に適用できない」ということ。

和紙を難燃化することができないかと考えていたところ、鳥取県産業技術センターで木材難燃化の研究開発をしていることを知り、センターの伴走支援のもと、和紙を難燃化に向けた開発をスタートされました。

同社は、県のEV実装評価を通じた車載向け商品を開発する中で、産業技術センターの技術支援を受け、自動車内装材料の難燃性基準検査に合格し『不燃性適合』に至りました。



事前検証の様子



回転機構による姿勢変更



とっとりロボットハブ

技術提案・人材育成事例

とっとりロボットハブを活用して、 製造工程の自動化を実現！

■ 鳥取ロボスターツール株式会社

鳥取県産業技術センターは、企業が製造工程の自動化（産業用ロボット活用）を検証できる「とっとりロボットハブ」を設置しています。

作業工具等を製造する鳥取ロボスターツール株式会社は、製品を製造する一連の工程をロボットを用いて自動化することを検討されていました。

そこで、ロボットを用いて、鋳造→バリ取り→研削の各工程をつなげる際に必要となるランダムピッキング技術（ばらばらに積まれた部品の中から1つを取り出す技術）の構築をセンターが支援しました。

特に、ランダム配置された製品の姿勢を短時間で整え、次工程に渡す専用ロボットハンドと、姿勢を整えるための可動仮置台を連携させる動作プログラムをロボットシステムとして構築し、同社に技術提案したところ、これに基づいたロボットシステムが導入され、同社の製造工程のスマート化、製品の量産化の実現につながりました。



ピンク醤油のカプセル化
(ブリリアントアソシエイツ)



高アルコール飲料などを包むカプセル
(Aqua Theon Inc.)

研究開発事例

地元企業とコラボしたピンク醤油のカプセル化と 米国スタートアップ企業との連携 ～フードテック～

フードテックとは、“Food（食べ物）”と“Technology（技術）”を掛け合わせた造語で、最新のテクノロジーを駆使することにより、全く新しい形の食品を造り出したり、食品加工法を開発することを指します。

当センターでは、液体食品のカプセル化技術の開発に取り組んできました。人工イクラなど以前からカプセル化技術は存在していましたが、塩味や酸性の強い液体のカプセル化は難しかった中、これらの食品をそのままの味で美味しく召し上がっていただくための新たな技術の開発に成功しました。

この技術では、液体の種類やカプセルの大きさ等、企業のニーズに合わせた製品設計が可能です。食卓を楽しく彩る、液体食品の新しい切り口の新食品の実現を目指し、展示会への出展や海外展開（米国スタートアップ企業との連携）、企業との協働による商品開発に挑戦しています。

私たちセンターの
役割・ビジョン

Innovation Together

労働力人口 の減少



人口減少による人材不足。研究・開発が出来る人材の採用が様々な企業で難しくなっている

技術開発ニーズ の高まり



産業のグローバル化に加え、デジタル化やグリーン社会が進展する中、顧客ニーズを満たす新たな製品の開発が必要

共創・コラボレーション への期待の高まり



複雑化する社会課題に対し、1社ではなく、様々な関係者を巻き込んだ「共創」への期待が高まっている

「県内企業の技術力向上や高収益化
県内産業の発展につながる質の高い技術支援」を目指して

活動の柱

- ・ 県内企業への幅広い技術支援
- ・ 挑戦する企業の技術開発支援

活動方針

SDGs・カーボンニュートラルに向けた取組

重点 プロジェクト

- ・ デジタルトランスフォーメーション（DX）推進による生産性向上
- ・ フードテックを活用したフードロスの削減と食品の高付加価値化

企業が抱える課題や社会情勢の動向を把握し、
チームで意見を交わしながら、県内企業と県内産業の発展に貢献します。

働く人
インタビュー

Innovation Together

T 研究員 機械素材研究所 システム制御グループ 2023年採用(専門:メカトロニクス)

どんな仕事を担当していますか？

県内企業の生産現場の自動化を進めるための支援や、企業向けの機器操作研修開催などの人材育成を行っています。人手不足を解消するための手段として自動化を求める企業は多く、「どうしたら自動化が上手くいくか」という相談を受け、企業ごとの課題に応じたサポートをしています。

半年とか1年以上かけてじっくりと取り組む場合が多く、実装に向けて企業の方と二人三脚で検証・研究を進めていきます。多くの検討事項に対する産業技術センター設備を活用した検証や生産現場での試行を通して、相談いただいた企業の現場にどのようにロボットを導入するか取り組んでいます。

元々は物理学専攻だったのでロボットとは無縁でしたが、今まで学んできたことを活かしながら自分の強みを伸ばし、そして多くの企業のサポートをしていくため、日々仕事に向き合っています。



鳥取県産業技術センターで働くことを決めた理由と働く魅力は？

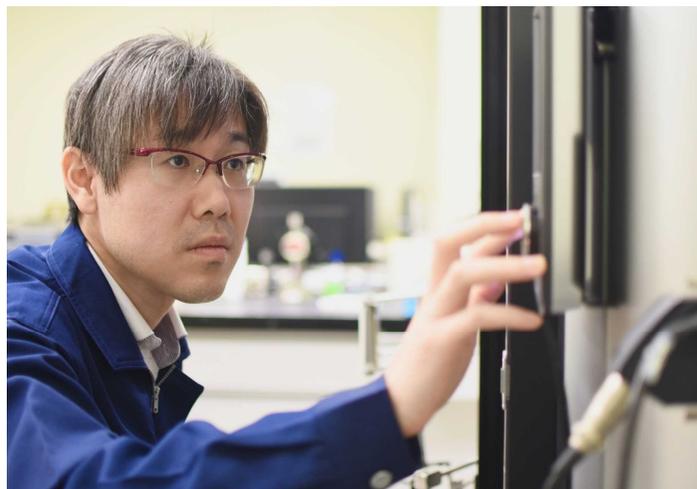


大学院卒業後、県外企業に就職しましたが、地元である鳥取県に帰ることを強く考え始めていました。ちょうどそのとき、100周年ということで新聞に取り上げられていた鳥取県産業技術センターを知り、全国的にも珍しいロボットハブがあることにも興味を持ったので採用試験に応募しました。

企業で働いていたときとは異なり、相談から始まって実際に企業の生産現場に行ったり実験をしたりと本当に様々な業務に携わっています。このように、自分で担当する仕事の範囲が広く、先輩に相談しながらも、常に自分で考えながら主体的に仕事をする点ができる点が大きな魅力だと感じています。

また、職場内の世代の近い人とはプライベートでも関わりがあったり、年齢が離れていてもどの人にも気軽に相談することができたり、とても働きやすい環境であることも、魅力のひとつです。

M 主任研究員 電子・有機素材研究所 有機材料グループ 2013年採用(専門:プラスチック成型加工)



どんな仕事を担当していますか？

プラスチックの成形加工をメインに担当しています。新しい素材を使って希望通りに成形できるか、不良は出ないかといった企業からの相談に専用の機械を用いて対応します。

また、国・県ともに環境に配慮した材料の開発を進めていることから、リサイクルや天然素材を混ぜ、石油由来のプラスチックを減らす研究開発も行っています。企業の担当者を集まってもらう機会を設け、技術の普及を図っているところです。

地域産業を支援する役割の公設試験研究機関で働いていると、「地元の企業がこんな製品を作ってるんだ」と新しい発見をする機会が多く楽しいです。自分の専門性を活かし、幅を広げて、企業に使ってもらえる技術、研究成果をいかに生み出すかに挑戦していきたいです。

鳥取県産業技術センターで働くことを決めた理由と働く魅力は？



プラスチックに関する専門性を活かせることや、自分が携わった技術やアイデアを世の中に出せる仕事がいいなど、研究の自由度がある公設試験研究機関の研究員を目指しており、ちょうど募集があった鳥取県産業技術センターに応募しました。

現在携わっている、環境に配慮したプラスチックの研究には、修士課程で学んだプラスチックに稲藁などを混ぜる「複合化」の知見を活かすことができます。また、博士課程で探求した、プラスチックを二次加工するときの樹脂内部で起きる構造変化についての見識は、信頼性評価をする際に力を発揮していますね。

他の研究機関の人と交流し先端研究の情報収集を行うなど、自らも向上しながら県内企業を支援できることにも魅力も感じています。

B 研究員 企画・連携推進部 2016年採用(専門:食品化学)



どんな仕事を担当していますか？

企画部門でプロジェクトの企画、組織内の調整を行いながら、研究開発も担っています。県内企業からお困りごとを伺った際に、センター内で相談しながらですが、どうすればご支援できるか自らも考え、答えを出すことを大切にしています。

現在、フードロス、フードテックに関する研究を担当しています。私に関わって開発した商品のひとつに、醤油をカプセル化した食品があるのですが、サラダなどにのせると華やかで、パーティーシーンなどでご活用いただける今までにない食品になりました。

2023年度は「開発したものを広くたくさんの人に見ていただく」「一番大きい展示会がいいよね」とプロジェクトメンバーと話し合い、海外の方も来られる大規模な展示会出展に初挑戦しました。大変でしたが、台湾や中国からの来場者からも反響をいただくことができ、達成感がありました。

鳥取県産業技術センターで働くことを決めた理由と働く魅力は？



県外の民間企業で研究開発に5年間携わった後、鳥取でキャリアを模索していた時期に、出身大学の先生から鳥取県産業技術センターが職員を募集していると教えてもらったことがきっかけで応募しました。

自分がやりたいと思う研究を提案できる環境です。現在は規格外の柿を活用したおいしい加工法を研究しています。過去に携わったカラフルな色のお酒の研究は、県内企業での商品化につながりました。自分の研究成果が製品として見えるところにもやりがいを感じます。

そして、育児や介護を応援する制度があるのも大きな魅力のひとつ。現在子育て中ですが、保育園の急なお迎えが必要な時などに時間休暇を取得でき、とても助かっています。

Y 上席研究員 電子・有機素材研究所 有機材料グループ 2004年採用(専門:天然高分子材料)



どんな仕事を担当していますか？

県内企業からのプラスチックやゴム、電子製品まで幅広い分野について技術相談に対応しています。性能評価・受託分析や新しい技術を開発したいという企業の支援を担い、たとえば、製品に付着した汚れの根本的な原因を特定するなどのサポートを行います。

加えて力を入れているのが、世の中の状況と県内企業のニーズを反映したセンター独自の研究開発です。有機素材グループでは、温室効果ガスの排出をなくそうという社会の動きを念頭に、環境に優しい材料の開発に着手しました。たとえば、プラスチックは石油由来の物質なので、使用量を低減する方法や、代替材料の開発に関する研究に取り組んでいます。

鳥取県産業技術センターで働くことを決めた理由と働く魅力は？

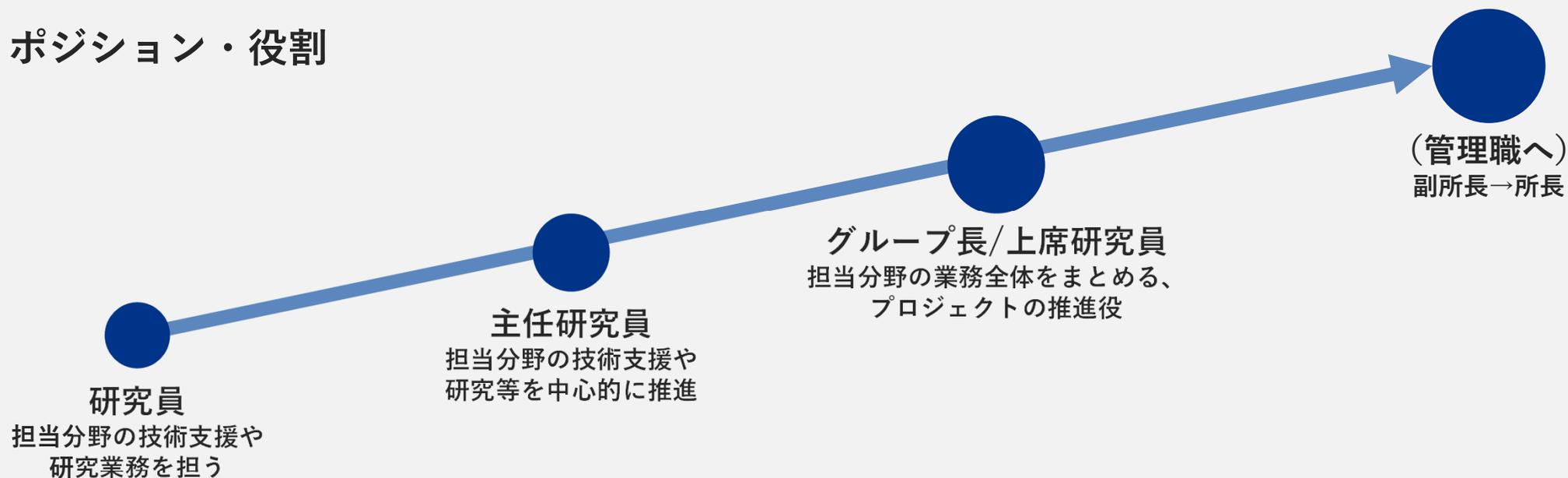
大学院の指導教官から職員募集があると聞き、はじめて公設試験研究機関の存在を知りました。業務内容を調べた際に、多くの地元企業の役に立つ仕事ができると感じたことが応募のきっかけです。

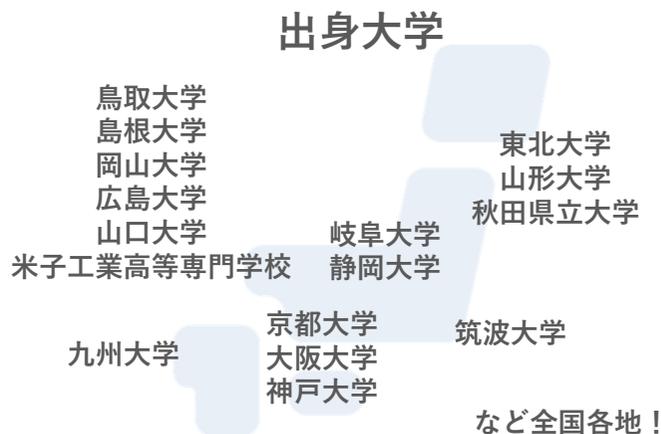
いろいろな製品に触れる機会があることがこの仕事の魅力のひとつです。現場に行って製造工程を見せていただく際には、普段使ってる製品がどうやって作られているのかが分かり、ワクワクします。

また、経験を積むにしたがって、社会や企業の課題・ニーズに応じて研究テーマを決めるだけでなく、自由な発想で自分がやりたい企画や研究にも取り組むことができます。成果を企業に還元できると、誰かの役に立てたと実感することもできるんです。

まずは研究員として、自身の担当分野の知見を活かした技術支援や研究業務を担います。
その後、主任研究員、グループリーダー・上席研究員と、幅広い年代で活躍し、キャリアを重ねていきます。

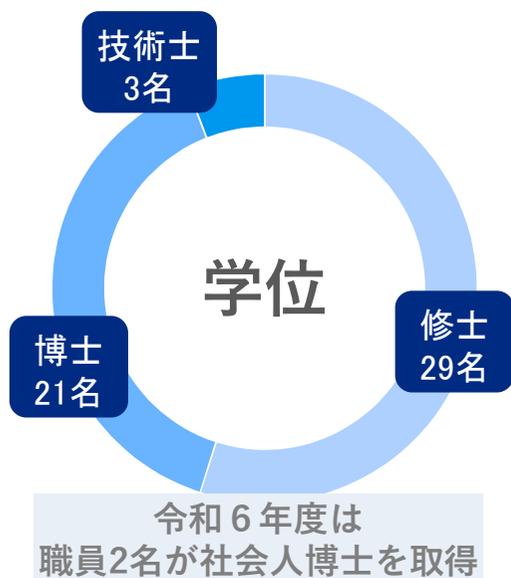
ポジション・役割





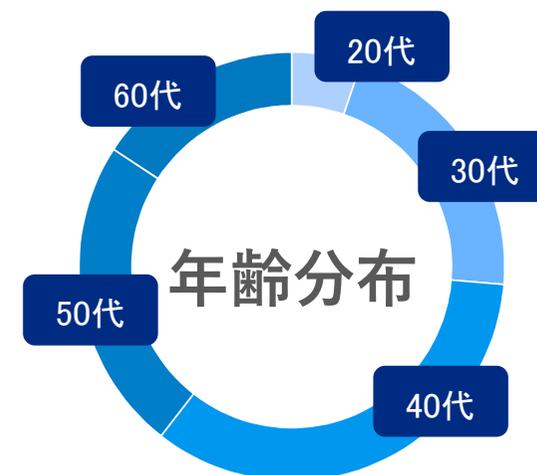
専攻・研究

化学／農業／林業／機械技術
食品科学／高分子材料
応用生物化学／電子工学技術
マイクロコンピューター制御 など



**論文・口頭発表
の実績も多数**

学会等での外部発表にも
注力しています



働く環境、待遇など

Innovation Together

鳥取県職員の給与体系に準じた給与・福利厚生制度

初任給	
研究職歴や関係職歴に応じて加算があります(昇給:年1回)	
学部卒	234,400円/月
修士課程修了	251,500円/月
博士課程修了	270,900円/月
大学院卒かつ民間企業経験者(5年)の場合	277,600円/月程度
大学院卒かつ民間企業経験者(10年)の場合	290,200円/月程度
その他手当	
期末勤勉手当(ボーナス)	年2回 合計4.2ヶ月(2023年実績)
扶養手当	規定に基づき支給
住居手当	規定に基づき支給
通勤手当	規定に基づき支給
その他福利厚生	地方職員共済組合法、地方公務員災害補償法適用

(参考)キャリアを積んだ職員の給与モデル

(2025.3時点)

- ・修士修了・勤続15年 年収:約570万円(基本給、諸手当等) うち期末勤勉手当(ボーナス):約150万円
- ・修士修了・勤続20年 年収:約650万円(基本給、諸手当等) うち期末勤勉手当(ボーナス):約170万円

就業時間	週38時間45分 8時45分～17時15分(休憩:12時～13時)
働く場所	本部／電子・有機素材研究所:鳥取県鳥取市若葉台南七丁目1-1 機械素材研究所:鳥取県米子市日下1247 食品開発研究所:鳥取県境港市中野町2032-3
休日・休暇	<ul style="list-style-type: none"> ・完全週休2日制(土日・祝日、年末年始(12/29～1/3)) ・年次有給休暇20日(時間単位での休暇取得も可能です。)
特別休暇	夏季休暇:5日間 ボランティア休暇:5日間 看護休暇:5～10日 など
育児を応援する制度	育児休業、育児短時間勤務、部分休業の他、一定の基準をもとにフレックスタイム、在宅勤務も活用できます。



- 
- 鳥取県男女共同参画推進
認定企業
 - 鳥取県家庭教育推進
協定企業



3ヶ月の育休を2回取得し
育児と仕事を両立する男性研究員も。



学習支援あり
社会人博士取得の実績もあり、
働きながら研究者としての成長にも挑戦できます

Innovation Together

